東日本大震災10年

生前の愛犬トワを抱く川上さん。震災後の10年間を支えた相棒だった

「心に咲いた花は枯れない」

東松島市・無職川上由夫さん(82)
妻の和子さん＝当時(66)＝、長女の大内真弓さん＝同(43)＝、孫の龍さん＝同(14)＝と聖さん＝同(13)＝を亡くす

娘が孫と一緒に、私たち夫婦を避難させようと迎えにきてくれた。車3台で避難中、津波にのまれ、4人を失った。妻の最後の言葉は「犬を連れて逃げて」。犬のトワを抱き、流された車の中で一夜を過ごした。

なぜ自分だけが生き残ったのか、と生きる力を失った。妻の知り合いの住職夫妻に「あなたが死んだらだれが供養をするの」と励まされた。ボランティアも根気強く家の外に誘い出してくれ、一歩を踏み出せた。

自分だけがよければいいとの考えは駄目。世界に支えられて復興できたことに感謝する思いを込め、コンサートを毎年開いてきた。

昨年、心不全で心臓にペースメーカーを埋め込んだ。退院後、一緒に散歩し体力を取り戻させてくれたトワは2月5日に天国へ旅立った。この10年間、私を支え、多くの人々と結び付けてくれたことに感謝でいっぱいだ。今後も「心に咲いた花は枯れない」という思いと感謝の気持ちを伝え続けたい。

走り回る孫たち残像のように現れる。

津波で被災し再建した自宅前で思い出を語る正二さん(左)と妻ひで子さん

仙台市宮城野区・農業山田正二さん(74)
長男の妻の久恵さん＝当時(35)＝、孫の友太郎ちゃん＝同(4)＝、純之介ちゃん＝同(3)＝を亡くす

蒲生地区の自宅近くの畑は2人の孫、友太郎と純之介との思い出の場所。穴を掘って水を入れてやると、泥んこになって遊んでいた。今はその姿を見られないが、農作業中、ふと笑顔で畑を走り回る孫たちが残像のように現れる時がある。

長男夫婦と孫2人は深沼海岸に近いアパートで暮らしていた。震災発生時、長男の真は仕事で県外にいて、自宅にいた3人が津波の犠牲になった。自分が「逃げろ」と電話1本入れていれば、助かったかもしれないと思うと悔やまれる。

２０１２年4月10日、真が37歳で自ら命を絶った。あまりに突然の出来事で、どれだけ時がたっても受け入れることができない。なぜ死を選んだのか。一人で過ごしていると考え込んでしまうため、妻と話したり、誰かと何かをしたりする時間が欠かせなくなっている。

真は家族の所へ行くことを選んだと思うようにしている。生前は仕事に追われ、忙しそうにしていたから、今は家族４人でのんびりと暮らしているだろう。

僕と母の新たな挑戦父は応援してくれている。

栗原市・理学療法士阿部太哉さん(36)
父の良人さん＝当時(53)＝を亡くす

宮城県南三陸町職員だった父は、根っからの仕事人間だった。自分をひけらかすようなタイプではなかったが、父を知る人の話を聞くと本当に仕事を頑張っていたんだと分かる。

あの日、父は町防災対策庁舎に避難して津波に襲われた。防災対策庁舎は、最後まで地域のために仕事をして人生を全うした父を感じることができる場所。毎年、必ず3月11日に庁舎に行き、1年の目標を父に宣言している。

4月から、看護師の母と一緒に、訪問看護ステーションを栗原市で始める。診療所で理学療法士の仕事を続けるうちに、在宅の訪問リハビリをやりたい思いが強くなり、母と挑戦することを決めた。

20代で気功を習い始めた。気功には「全てのことに感謝できる」という教えがある。どうやったら震災に感謝できるのかをずっと考えてきた。

心の持ち方次第で物の見え方は変わる。自分にとって深い悲しみはあるが、良かったことがどこかに必ずある、と考えるようになった。気功の教えと真正面から向き合い、自分なりに理解することができた。

震災の1カ月後に、静岡県から妻と栗原市の実家に引っ越してもうすぐ10年。祖母、母、妻、子ども4人の8人でにぎやかに暮らしている。

震災や父の死で全く心が揺さぶられないかといえばうそになる。でも、家族の新しい未来を開くための力になっている。僕と母の新たな挑戦を、父は応援してくれている。

自宅の庭で家族と談笑する阿部さん（左端）＝栗原市

人を大事にする気持ちは今も変わらない。

自宅でタブレット端末を操作する山家さん

多賀城市・主婦山家まゆみさん(63)
父の鈴木正志さん＝当時(83)＝、母の和子さん＝同(79)＝を亡くす

父は人のために一生懸命尽くす人だった。温厚で腰が低い。民生委員や人権擁護委員を務め、人の相談に熱心に耳を傾けた。母は友人が多く、社交的な性格。家でよく客をもてなしていた。

人を大事にした2人。そんな2人を失ってから、彼らの間に生まれ、育ったことへの誇りと感謝の気持ちが強まった。そして、他の人に優しく接することができるようになった。

白石市に住む夫の両親が震災後、体調を崩した。多いときには週に6日、白石に通い、病院への送り迎えや家事を手伝った。肉体的にも精神的にも大変なはずなのに、全く苦にならなかった。2人との時間を大切にしたいと純粋に思えた。

娘2人が震災後に結婚した。初孫も誕生し、今では孫が4人もいる。日常の生活が忙しく、震災について深く考える機会は少なくなった。ただ、両親を見習い、人を大事にする気持ちは今も変わらない。

まちの再生娘に報告したい。

ミキさんの好きだったディズニーのキャラクター。震災後に相沢さんと妻美津枝さんが夫婦で集めた

東松島市・元会社役員相沢良章さん(64)
長女のミキさん＝当時(28)＝を亡くす

娘はパソコンのインストラクターをしていた。優しい子でお年寄りにも子どもにも「ミキちゃん」と親しまれていた。

後で聞くと、結婚後も親と一緒に住みたいという気持ちを周囲に話していたそうだ。ディズニーランドやお笑いライブによく出掛け、行動力のある子だった。

住んでいた東松島市大曲浜は津波で大きな被害を受け、地域全体がなくなった。地元とのつながりを一層大事にしたいとの思いが強くなった。集団移転では構想段階からまちづくりに参加し、自治会長も務めた。

仮設住宅ではたくさんの支援をいただいたが、いつまでも頼ってはいられない。集団移転で高齢化の問題にも直面して、自分たちの力が問われていると感じる。大曲浜では妻が地域の見守り活動に参加していた。移転先では私も手伝えることはしていくつもりだ。あの世に行ったとき、娘にこれだけのいいまちになったと報告したいと思っている。

「石川さゆり」と写真。

多賀城市・無職滝島智佳さん(87)
夫の和衛さん＝当時(81)＝を亡くす

夫は震災の1カ月前から自宅近くの特別養護老人ホームに入所していた。震災後は県内外5カ所の施設や避難所を転々とし、２０１１年6月に宮城県利府町の老人保健施設でたんを喉に詰まらせて亡くなった。

さみしさから仮設住宅の自宅にこもりがちになったが、その年の夏ごろ、歌手石川さゆりさんが集会所に来てくれて元気をもらった。それから集会所のイベントに出掛けるようになり、友だちも増えた。石川さんと撮った写真は今も大切にしまっている。

震災前、買い物帰りに夫が「世話になるなあ」と言ってくれた。とてもうれしくて今もその時のことを思い出す。

毎日、仏壇に声掛け。

仙台市太白区・仙台市任用職員目黒隆之さん(66)
妹の千佳子さん＝当時(49)＝を亡くす

妹夫婦には子どもがいなかったので、2人の娘の面倒をよく見てもらった。震災直前も次女と観覧車に乗ろうと、仙台港近くの商業施設に一緒に行ってたな。強風で乗れず「今度また行こう」とみんなで話したのが最後になってしまった。

あの日はきっと海に程近い自宅が心配で戻ってしまったんだと思う。日頃から津波への備えの話をしていればよかった、と自責の念は消えない。

今できるのは妹を忘れることなく、供養を続けること。毎日「朝だよ」と一声掛けて仏壇の扉を開け、お茶とご飯を供えている。命日やお盆、お彼岸は家族全員で墓参りし、手を合わせ続ける。

「絶対近くにいるよ」

大崎市・会社員柴田和子さん(56)
父の遠藤弘さん＝当時(69)＝を亡くす

２０１１年当時は、周りの状況として式典やニュースといった震災の話題が取り巻いていたので、悲しみや寂しさが大半を占めていたと思う。年々落ち着きを取り戻し、気持ちの変化としては父との何げない会話や様子を思い出して懐かしさが大きくなっている。

父を失い、受け止めてくれる存在がいなくて穴が空いたようだったが、気持ちの中に生きている。

助けとなったのは家族。同じ時を過ごした妹2人と共通の話ができるのは気持ちも落ち着くし、父の話題が出ると、みんなで「絶対近くにいるよ。聞いているね」と笑い合っている。でも、本当にいるような気がしてうれしい。

遺族、不明者家族の思い ⑧

河北新報アンケートから

人生リセットしたという気持ち。

自宅の作業場でがんづき作りに取り組む茂喜さんと妻たい子さん

宮城県南三陸町・元漁労長千葉茂喜さん(72)
兄の征市郎さん＝当時(69)＝を亡くし、兄の妻の愃子さん＝同(67)＝が行方不明

震災で人生をリセットしたという気持ち。兄夫婦ら親族12人を亡くし、全て流された者にしか分からないだろう。震災後、親戚付き合いの範囲を小さくしようと決めた。この辺りの集落はそういう流れだ。今はサンマ船から降り、農業の傍ら自家栽培の自然薯入りのがんづきや菓子を妻と作り、道の駅に卸している。

町は復興工事ですっかり変わってしまい、面影がなく懐かしさを感じない。愃子さんはいまだに見つかっていない。忙しい日々の中で、今でもどこかで暮らしているのではと思うときがある。

町では大勢の方が亡くなっており、兄夫婦が亡くなったことも仕方ないと思っている。仮に生き残っても必死に生きてつらいこともあるかもしれない。その人の寿命だという諦めもあるが、2人とも公務員として定年まで勤め上げ、「十分生きた」「生前いいこともあった」と思うようにしている。

震災で人生観が変わった。病気や事故で友人や知人が亡くなっても「その人なりにやるだけのことはやった」と思うようになった。

自宅で愛犬2匹と暮らす堀内さん＝石巻市

「コロナで大変だから、お母さんを守ってね。お願いします」

石巻市・飲食店経営堀内エリンダさん(56)
長女の平塚そのえさん＝当時(25)＝、孫の羽流ちゃん＝同(1)＝を亡くす

「コロナで大変だから、お母さんを守ってね。お願いします」と、毎日のように線香を上げ、仏壇に話し掛けている。震災後に支えてくれた人が亡くなったからか、前より一層娘たちに守られているような気がしている。

娘と孫娘は震災の1カ月後に車の中で見つかった。娘の夫はいまだに行方不明。諦めている気持ちも大きいけれど、見つかったら娘もほっとするのにと思う。

震災の後は、店の従業員が一緒にお酒を飲んだり、カラオケを歌ったりして支えてくれた。今も仕事があるから何とか気を紛らわせているけれど、娘たちの話をするとすぐに涙が出る。

娘は運転しなかったから、よく私の車で3人で石巻市内のショッピングモールに行った。3月11日も一緒に買い物に行く予定だった。「税務署に行った後に行くよ」と電話したのが最後になった。

羽流は車が大好きで、車に乗るとハンドルをくるくると回していた。本当にかわいい孫だった。生きていれば中学生になる。きっと活発な子になっていたと思うけど、赤ちゃんのままで止まっている。

娘が子どもを育て、孫が成長して学校に入る。震災で、その夢が一瞬で消えた。「人間ってこんなんだべな」と思った。

新型コロナウイルスの感染拡大で、経営する飲食店5店舗のうち2店舗は休業している。コロナが落ち着いたら、また開けたい。大変だけど、いいときも悪いときも頑張るしかない。

振り返ると、苦しくなってしまう。

水揚げしたカキの殻むきをする佐々木さん

岩手県山田町・漁業佐々木友彦さん(46)
姉の阿部育子さん＝当時(41)＝、おいの尚貴さん＝同(16)＝を亡くす

震災前には戻れないという虚無感が強い。あの日、私の仕事を手伝ってくれていた姉に的確な判断を伝えることができていれば、津波の犠牲にならずに済んだかもしれない。

それでも日々、生活していかないといけない。姉には申し訳ないが、新しい出会いも大切にしたいと思う。一方で、何とか前を向こうとしている私自身が、とてつもなく疲れているのが分かる。震災を振り返ると苦しくなってしまう。

15歳のおいが、35歳になった時の自分に向けて残したノートがある。結婚観や仕事など、将来への希望がつづられている。最後に「自分のペースで夢を掴んでください。健闘を祈る」と結んである。なのに35歳を迎えることができなかった。それが悔しい。

血を分けた姉とおい。特定の場所や何かではなく、自分の記憶の中で感じている。

思い出の品、自分たちが亡くなる前に整理したい。

次男の遺影や思い出の品を並べた棚の前で思いを語る小野さん

宮城県亘理町・無職小野時郭さん(74)
次男の宏行さん＝当時(33)＝を亡くす

次男は職場から自宅に戻った後、津波に巻き込まれた。一緒に暮らしていたので急にパッといなくなったという感覚がある。

なぜ津波に巻き込まれたのか。なぜ避難しなかったのか。消防団に止められたと聞いたが「すぐ帰る」と行ってしまった。真っすぐ逃げてくれていれば助かったかもしれない、という思いが今もある。

津波は自宅の1階天井まで襲った。次男の部屋は2階にあり、趣味の邦楽CDなどは無事だった。洋服やゲームソフトもあったが捨てるに捨てられず、新築した自宅に持ってきたり、自宅跡地に設置したコンテナ倉庫にしまったたまにしたりしている。思い出が詰まっている物ばかりだが、自分たちが亡くなる前に整理したいと思う。

月命日には必ず墓参りに行く。先に友だちが来て焼酎を置いているときもある。友だちに恵まれた子だった。10年たっても来てくれてありがたい。

イメージ湧かない。

気仙沼市・高校教員阿部成子さん(24)
父の良孝さん＝当時(58)＝、祖母のやよ子さん＝同(84)＝を亡くす

南三陸町戸倉の実家は全壊し、母と共に移り住んだ登米市で自宅を新築した。父と祖母が津波から逃れて無事だったとしても、その後、幸せに暮らせただろうか。みんなで生活しているイメージが湧かない。

2人の人生は戸倉の地と1セットだったから。亡くなるまで地元を離れることはなかった。知り合いと離れて別の地で生活したら、きっとつらい思いをしていたと思う。

更地になった実家の跡に立ち寄ると、震災前の記憶が鮮明によみがえる。2人が生きていたら、進学や就職の際にどんなに喜んでくれただろう。一緒にお酒を飲んだり、ばか話ができたら…。つい想像してしまう。

「過去には戻れない」

気仙沼市・南三陸町職員松本裕生さん(24)
父の伸さん＝当時(42)＝を亡くす

震災から10年。自分も大人になり、南三陸町役場で働いている。

震災が起きた時は中学3年だった。子どもから見た父としての姿しか知らない。一人の男としてどんな思いや考えを持って生きていたのか。男同士、一緒に酒を飲みながら話をしたかった。

父のことは普段意識しないが、思い出すと悲しくなる。「人は死んだら終わり」「過去には戻れない」。父を失い、当たり前のことに気付かされた。亡き父の分まで生きていく。

愛犬のタロー形見だと思って育てる。

おいからもらった愛犬タロー。具合が悪いとき、おいに「タローを助けて」と願うという

仙台市若林区・主婦佐藤修子さん(79)
姉の末永登喜子さん＝当時(85)＝、おいの恵司さん＝同(58)＝が行方不明、おいの妻浩美さん＝同(49)＝を亡くす

地震発生の2時間半前、宮城県女川町の姉の家に寄った。姉と浩美さんが「じゃあまたね」と見送ってくれたのを、今も鮮明に覚えている。

浩美さんは5月ごろに見つかったけれど、姉とおいは今も行方不明のまま。お墓には姉の診察券とおいの免許証だけが眠っている。毎年3月11日ごろに女川に行き、町立病院から女川湾を眺める。海の商売をしていたから、2人はきっと海にいるんだと思う。静かな海を見ていると「どうして津波が起きたのだろう」と思ってしまう。

年が離れていたせいか、母のような姉だった。姉からは「修子ちゃん」と呼ばれ、よく相談に乗ってもらった。おい夫婦とも仲が良く、震災直前の2月に69歳の誕生日を祝ってもらった。15年前においがプレゼントしてくれた愛犬のタローを形見だと思って大事に育てている。

一生懸命捜したけど見つからない。今は2人とも見つからないなら、その方がいいと思っている。1人だけが見つかって、どちらかが独りぼっちになってしまうのは寂しいから。